役員用

平成２８年１１月１１日

平成２８年「まほろば会秋の見学旅行」資料

神話のふるさと『出雲』を巡る旅（出雲大社・荒神谷遺跡・松江城ほか）

平成２８年１１月１１日（金）～１１月１３日（日）

まほろば会

はじめに

今回の見学旅行は、「神話のふるさと『出雲』を巡る旅」と銘打って、「出雲大社・熊野大社・佐太神社・鰐淵寺」などの神社・仏閣、そして１９７０年代以降「国宝的発掘（発見）」が続いた「神庭荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡」、山陰で唯一天守閣が残っている「国宝・松江城」などを巡る企画としました。

当会では、約２０年前に出雲路を見学地として選んでおります。重複している見学場所もありますが、「１０年ひと昔」と申します通り、再訪の方にも新たな発見が期待できる内容になったと幹事一同自負しております。

さて、「出雲」と言えばやはり「神話の国」というイメージでしょうか。「古事記」や「日本書紀」に書かれている神話の中で、素戔嗚尊（スサノオノミコト）や大国主命（オオクニヌシノミコト）などの「出雲系の神々」や「出雲」を舞台とする神話の数の多さには圧倒されます。
「古事記」を例にとると、「神代」の記述の実に三分の一以上は「出雲の神話」なのですから驚きです。

そして、出雲に関してはもう一点興味深い古典があります。７３３年に成立した「出雲国風土記」です。現在５つの国の分しか遺っていない「風土記」の中でも「完本」として遺っているのは、この「出雲国風土記」だけです。
「出雲国風土記」（以下「風土記」と言います）は「古事記・日本書紀」（以下「記・紀」と言います）とほぼ同じ時代にまとめられたものなのに、「記・紀」とは一味違った神話をたくさん載せています。たとえば、スサノオノミコトは「記・紀」では荒ぶる神のイメージが強いのですが、「風土記」では少しも荒ぶる性格が見られず、また、オオクニヌシノミコトは「天の下造らしし大神」と称されて絶対的な役割を担っています。２日目の朝のバス車中では、高川先生（幹事）の講義をお楽しみください。今回の見学旅行がきっかけで「記・紀そして風土記」に一層の関心を示していただければ幸いです。

もちろん当会の見学旅行は「神話」だけではありません！
１９８４年の歴史的大発見を、皆さんは覚えていらっしゃることでしょう。宍道湖の西、出雲市斐川町神庭西谷にある「（神庭）荒神谷遺跡」で、３５８本という大量の「銅剣」が見つかったのです。それまで日本全国から出土した銅剣が３００本余りであったことから考えても、この遺跡がどのぐらい凄いかが分かるでしょう。そしてまた、その１２年後には荒神谷遺跡から南東約３キロのところに「加茂岩倉遺跡」が見つかり、１か所からの発見としては最多の３９個の「銅鐸」が出土したのです。

今回の旅行では、上記以外の見学場所として「国宝松江城」もお楽しみいただきます。２泊３日の「出雲路の旅」を十分にご堪能ください。

幹事一同

平成２８年度　まほろば会秋の見学旅行（神話のふるさと『出雲』を巡る旅）予定表

＜日程＞　平成２８年１１月１１（金）から１３日（日）までの２泊３日の旅行です。

＜集合＞　１１月１１日（金）１３時３０分までにJR「米子駅」改札出口付近に集合します。

＊全員集合ののち貸切の「一畑バス」（解散まで一緒）に乗車し、下記「見学予定地」を回ります。

＜解散＞　１１月１３日（日）１５時ごろJR「米子駅」にて解散します。

＜見学予定地＞

１１月１１日（金）	佛谷寺	松江市美保関町美保関５３０	℡0852-73-0712
	美保神社	同　６０８	℡0852-73-0506
	出雲玉作資料館	松江市玉湯町玉造９９－３	℡0852-62-1040
	出雲玉作史跡公園	同　８５－８他	℡0852-62-1040（玉作資料館）
	玉作湯神社	同	℡0852-62-0006
（宿泊地）	玉造温泉「玉井別館」	同　１２４７	℡0852-62-2473
１１月１２日（土）	出雲大社	出雲市大社町杵築東１９５	℡0853-53-3100
	古代出雲歴史博物館	同　９９－４	℡0853-53-8600
	猪目洞窟	同　猪目町１３３８	℡0853-53-2112（出雲観光協会）
	鰐淵寺	出雲市別所町１４８	℡0853-66-0250
（昼食）	「和食居酒屋　神門」	同　駅南町１－３－３	℡0853-24-6668
	西谷墳墓群・弥生の森博物館	同　大津町２７６０他	℡0853-25-1841（博物館）
	（神庭）荒神谷遺跡・博物館	同　斐川町神庭８７３－８他	℡0853-72-9044
	加茂岩倉遺跡・ガイダンス	雲南市加茂町岩倉８３７－２４	℡0854-49-7885（ガイダンス）
（宿泊地）	米子「ワシントンホテルプラザ」	米子市明治町１２５	℡0859-31-9111
（宴会場）	「三代目網元魚鮮市場」	同　１４０	℡0859-38-8811
１１月１３日（日）	熊野大社	松江市八雲町熊野２４５１	℡0852-54-0087
	須我神社	雲南市大東町須賀２６０	℡0854-43-2906
	八雲立つ風土記の丘	松江市大庭町４５６	℡0852-23-2485（展示学習館）
	神魂神社	同　５６３	℡0852-21-6379
	八重垣神社	同　佐草町２２７	℡0852-21-1148
	佐太神社	同　鹿島町佐陀宮内７３	℡0852-82-0668
（昼食）	「しじみ館」	同　千鳥町３６	℡0852-28-7511
	松江城	同　殿町１－５	℡0852-21-4030（公園管理事務所）
	松江歴史館	同　２７９	℡0852-32-1607

出雲神話について　　記紀神話と出雲国風土記の世界

一般に出雲神話と言った場合には、古事記や日本書紀に描かれた神話を指す（記紀神話と言う）　しかし、出雲には同時期に編纂された「出雲国風土記」があり、奇跡的に今日まで写本が伝えられていることから、当地のオリジナルな伝承はむしろ、この風土記の内容を尊重すべきだと考えられる。

記紀神話によると、天の原で乱暴狼藉を働いたスサノヲが天上界を追放されて出雲の国へ降り立ったところから話が始まる。八岐大蛇退治の後、スサノヲから七代目のオオクニヌシが登場し、因幡の白兎や八十神（兄弟神）のいじめ、などを経てスセリ媛（スサノヲの娘）と結婚し、やがて出雲全土を平らげる。
その後、天上界は神々を派遣してオオクニヌシに国譲りを迫り、とうとう国土を奪い取ってしまう。（オオクニヌシはその見返りに天の大殿に負けないほどの立派な宮殿を建てることを了承させた）

天津神（高天の原・天神）と国津神（葦原中津国・地祇）の区別
※記紀は神々の子孫としての天皇が、この国を統治する由来と正当性を縷々述べている。

※神ではない人間どもは青人草（あおひとくさ）として、あくまで問題外という扱いである。

※大和朝廷の記紀編纂時の史観は、あくまでヤマト中心の立場を貫ぬいていることが、オオクニヌシのヤマト上りや御諸山の神祀りなどの記述に見出すことが出来る。（なぜ、国譲りの場所が大和ではなく出雲なのか、疑問が残る）

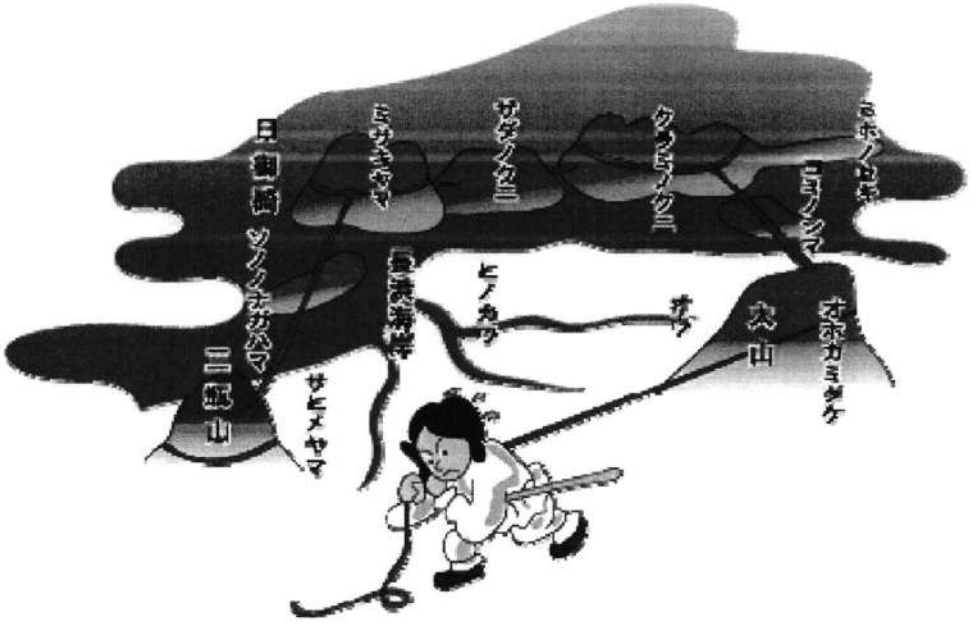
出雲の国風土記　（唯一の完本）

・国造りの主人公はヤツカミズオミズヌノミコトであり、海の彼方から土地を手繰り寄せて国土を築いた（国引き神話）
　（ヤツカミズの系譜はスサノヲとオオクニヌシの間とされている）
・スサノヲの伝承は一切書かれていない（新羅との確執が影響したか）
・ヤマタノオロチ征伐の記述は無い（オオクニヌシの越の八口平定伝承在り）

※編纂者は出雲国造の出雲臣広島であり、国司が当たったのではない。　完成まで約２０年の間（風土記では最長）大和朝廷との間において確執や調整などが行われた結果ではないか、と推察される。

※熊野大社（クマヌノオオヤシロ：主祭神はスサノヲ）は、平安時代のある時期までは杵築大社（キヅキノオオヤシロ・現出雲大社：主祭神はオオクニヌシであるが、江戸期にスサノヲから古代に回帰した）より祭祀ランクが格上の存在であった。
地位の逆転は平安後期（１１世紀後半）に国造が本拠を移したことと関連があるものと見られる。
現在でも国造の火継ぎ神事に、格上の存在としての名残が見られる。

※「神話のふるさと」としての観光スポットは、お伊勢参りや善光寺参りなどと同様に江戸時代に形成されたものであろう。



美保関（みほのせき）

佛谷寺と美保神社

みどころは・・・

佛谷寺　五体の一本造り仏像

美保神社　大社造の左右二殿連棟の本殿。美保造　比翼大社造とも呼ばれている。
両社参り（美保神社・出雲大社）でご利益倍増。ニ礼二拍手一礼。
（出雲大社は二礼四拍手一礼）

両寺社を結ぶ　情緒ある青石畳通り・・・古い町並み　家紋と屋号　美保の醤油・・・・

龍海山三明院　佛谷寺（りゅうかいさん　さんみょういん　ぶっこくじ）

・宗派：浄土宗　　・本尊：阿弥陀如来　　・開基：行基菩薩（約１，２００年前）

由緒

境内の大日堂は五体の仏像が祀られている。海に３つの妖火が現れ、住民、航海人はこれを三火（みほ）と恐れられていた。そこに行基が訪れ、三火を封じたる仏像を彫り、堂を建立した。後に弘法大師が七堂伽藍を建立、真言宗となるが、永世１２年（１，５１６年）に浄土宗になっている。永禄・天正年間に七堂すべてが焼失するが、諸仏は難を逃れ現在に至っている。

＊１３・１４世紀、隠岐に流刑となった、後鳥羽上皇、後醍醐天皇が風待ちのために立ち寄った行在所（あんざいしょ）とされた。

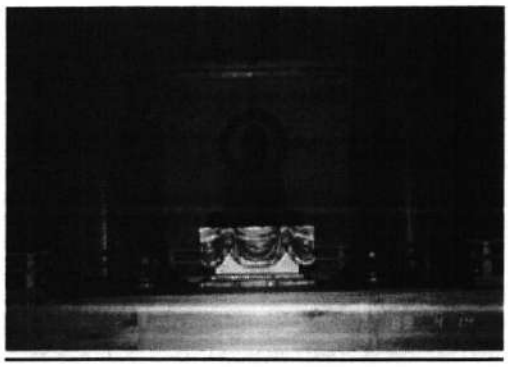
＊八百屋お七の恋人の吉三がお七の処刑後巡礼の旅に出、７０歳でこの地で亡くなり、ここで葬ったとの言い伝えがある。＜吉三の墓＞

佛谷寺の仏たち

大日堂には１、薬師如来坐像　２、日光菩薩立像　３、月光菩薩立像

４、虚空蔵菩薩立像　５、聖観音菩薩立像　　（以上五体の国重文）

および毘沙門天立像　阿弥陀如来坐像がある



1

2

3

4

5

美保神社

事代主神（ことしろぬしのかみ）を祀る「えびす社」３，０００余社の総本社であることを自称している。

祭神

向かって右殿に**三穂津姫命（みほつひめのみこと）**、左殿に**事代主神（ことしろぬしのかみ）**を祀る。
三穂津姫命は大国主神の幸魂奇魂（さきみたま・くしみたま）である大物主神（おおものぬし）の后神五穀豊穣、夫婦和合、安産、子孫繁栄，音楽の守護神とされている。
事代主命は大国主神の第一の御子神、福徳円満の神、「えびす様」として海上安全、大漁、商売繁盛、音楽、学業の守護神とされている。

由緒

創建は不詳、天正五年（７３３）に編纂された「出雲国風土記」、延長五年（９２７）の延喜式神名帳（えんきしきじんみょうちょう）に記載される古社である。

社殿

現在の本殿は文化１０年（１８１３）の造営。大社造の左右二殿連棟のめずらしい形で、「美保造」または「比翼大社造」と呼ばれ国の重要文化財に指定されています。

昭和３年（１９２８）に拝殿以下、現在の神域が完成、本殿を始め拝殿、神門、廻廊、通塀ともに屋根は檜皮葺である。

＊近世ごろから「大社（出雲大社）だけでは片詣り」と言われるようになり、出雲大社とともに美保神社の参拝者が増えるようになったといわれている。

玉作湯（たまつくりゆ）神社と玉造温泉

玉作湯神社

奈良時代の「国土風土記」（天正５年（７３３））に記された神社で、式内社でもある。

祭神＜玉作神と湯神＞

・櫛明玉神（くしあるたま）・・・八坂に（やさかに）等宝玉御制作の租神
・大名持神（おおなもち）・・・当地温泉発見温泉守護
・少彦名神（すくなひこな）・・・温泉療法・薬・秘呪（まじない）の租神
・五十猛神（いそたける）・・・配祀神（はいししん）韓国伊太氏社　山林育成・産業繁栄の租神

玉作とは玉類（勾玉・菅玉など）の制作を意味する。この一帯は出雲地方における玉作の中心地とされ、弥生時代末期に始まる玉作遺跡が濃密に分布する。神社境内は全域が国指定史跡です。
明治以降、天皇即位の式典に際し、ここで作られた瑪瑙（めのう）碧玉（へいぎょく）製品が献上される。
本殿は安政４年（１８５７）の再建。大社造を変形した様式。

願い石と叶え石・・・叶え石（社務所で授）を願い石（境内）にくっつけると願いが叶うとされている。

玉造温泉

少彦名神の発見と大名持神が温泉療法を開いたと伝えられ、現在の玉造温泉駅から玉造川に沿って約２キロ、玉造郷にあって玉造川を挟み人家が連なり一地区をなしている。

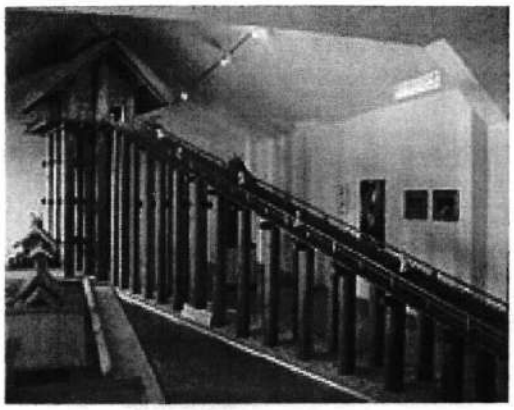
（詳細は神社パンフ参照）

出雲玉作史跡公園

松江市玉湯町にある考古遺跡「出雲玉造跡」の保存と公開を目的として整備された公園である。当公園は古墳時代から奈良時代・平安時代にかけ勾玉や菅玉の生産地として栄えた花仙山の麓、玉造温泉街を見下ろす玉湯川右岸の丘陵に位置する。公園内には、記加羅志神社跡古墳、復元された竪穴式住居、玉作工房跡などがある。遺跡からの出土品は玉作湯神社および隣接する**「出雲玉作資料館」**にて保存されている。

出雲大社

拝殿（手前）と本殿（右奥、国宝）



古代の本殿の模型

[見学にあたっての事前知識]

６０年に一度の遷宮「平成の大遷宮」は、平成２０年４月から平成２８年３月まで行われ、本殿だけでなく、境内・境外の摂社・末社でも修造がなされました。平成２５年５月には、６０年ぶりに行われた大改修による遷宮、「本殿遷座祭」が行われました。

出雲大社の本殿は独特の建築様式をもっており、「大社造」と称されています。大社造の特徴は切妻造と妻入りですが、分かり易い特徴としては、地面から社殿の床までの柱が長いことが挙げられます。したがって、社殿自体が高層になり足が長くて背の高いスマートな社殿です。

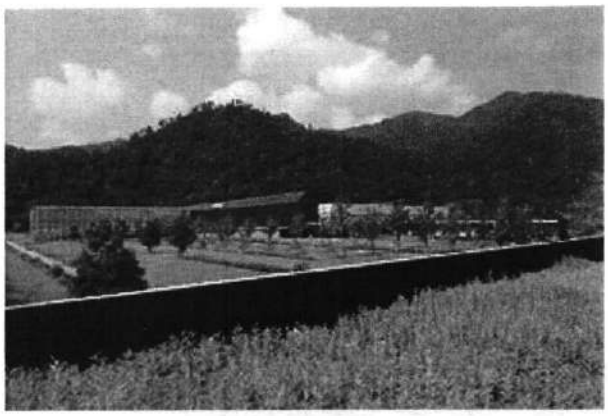
「雲太・和二・京三」という言葉を聞いたことがありますね？天禄元年（９７０年）にまとめられた「口遊（くちずさみ）」に書かれた言葉で、一番高いのが出雲の出雲大社、二番目が大和の東大寺大仏殿、三番が平安京の大極殿と言われていたのです。

大仏殿が十五丈（約４５メートル）と言われているところから、出雲大社はそれより高かった（現在の本殿の高さは八丈（約２４メートル）あり１７４４年の造営ですが、社伝ではその倍の十六丈（約４８メートル）あったとされています。）ということなのです！そして、そのことが平成１２年の大発見で「実証」されたのです。本殿の八足門の前から直径１．３メートルの柱を３本まとめた形の柱が出土したのです。３本まとめた柱は直径約３メートルとなり、しかも、これらの材木は１２００年前後の伐採ということもわかったのです。

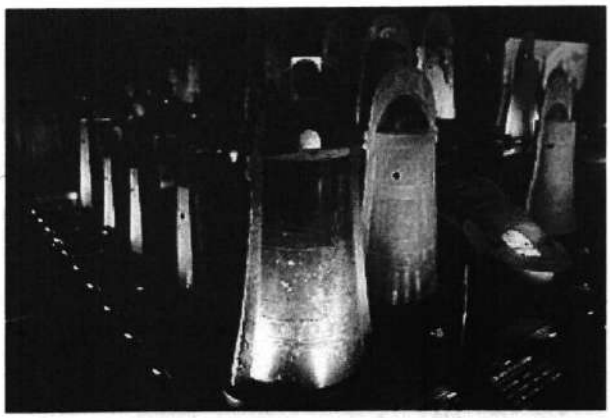
[見どころ]

・勢溜（せいだまり）の大鳥居：２の鳥居。木製。
・銅鳥居：１６６６年に長州藩主毛利綱広が寄進した鳥居。
・本殿：１７４４年造営と伝わる、「国宝」の大社造り建物。
・神楽殿：重さ４．４トンの大注連縄が有名。
・素鵞社（そがのやしろ）：素戔嗚尊を祀る摂社。本殿真後ろの八雲山の麓に鎮座。
・八足門：１６６７年造営の重要文化財。左甚五郎作と伝えられる彫刻が施されている。

古代出雲歴史博物館



建物全景



館内展示物の一つ,加茂岩倉遺跡から出土した銅鐸（国宝）

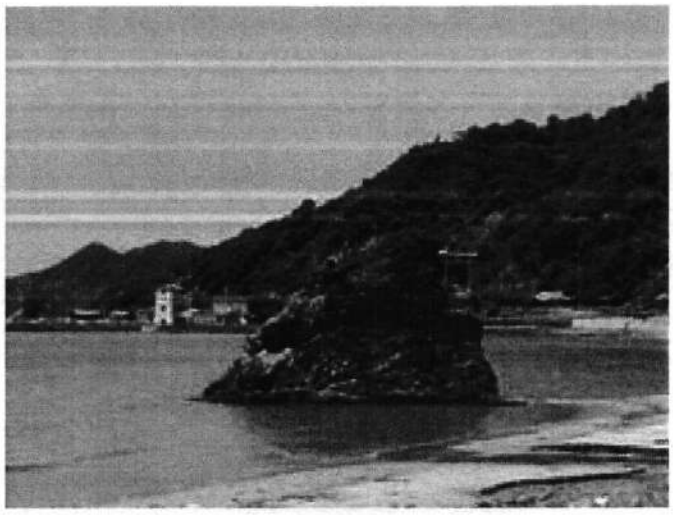
[見どころ]

・出雲大社巨大柱・古代本殿１/10 復元模型

・宇豆柱（うずばしら）：平成１２年に出雲大社境内遺跡から出土した本殿の巨大柱。

・銅剣、銅鐸、銅矛：神庭荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡から出土した青銅器。国宝。

稲佐の浜



稲佐の浜と弁天島

[見学にあたっての事前知識]

「国引き神話」の舞台として、毎年旧暦の１０月１０日に出雲大社の「神在祭」の重要な神事の一つである「神迎神事（かみむかえしんじ)」が行われます。神在祭がはじまる旧暦１０月１１日の前夜、浜辺には神火が焚かれ「竜蛇さま（海蛇)」を神々の使いとしてお迎え。激しい風雨に乗って海蛇が浮かび寄る。これを竜蛇さまと呼んで、八百万の神々が大社に参集する際に、神の使いとしてやって来るものとされているのです。

猪目洞窟遺物包含層

国指定史跡　1957(昭和32年)7月27日　　猪目洞窟遺物包含層

県指定文化財　1974(昭和49年)12月27日　猪目洞窟遺跡出土遺物

島根半島の日本海に面した小さな漁村だが、海に切れ落ちる崖を削った狭い道路を抜けた処に、今は船着き場となった洞窟が大きく口を広げている。
昭和23年船係留地としての工事の際に発見された。幅30m奥行30mで縄文中期の土器片・弥生・古墳後期までの埋葬と生活遺品が出土した。人体13体も見つかった。1700 年前の女性の白骨が状態よく残っており現在も大社で保存展示されている。

猪目洞窟は風土記に、伊邪那岐命(イザナギノミコト)が、死んだ伊邪那美命(イザナミノミコト)を迎えに行った黄泉の国の入り口である。「夢にこの磯の窟の辺に至れば、必ず死ぬ。故、俗人古より今に至るまで、黄泉の坂、黄泉の穴と名づくるなり」と書かれ、夢で猪目洞窟を見た者は必ず死ぬ、ここは黄泉の穴であると記されている。黄泉比良坂(よもつひらさか)と同質の窟戸とされている。

宇賀郷　郡家西北17里025歩。"所造天下大神命"、誂坐 "神魂命"御子 "綾門日女命"。爾時、女神 不肖、逃隠之。時、大神 伺求給所、是則 此郷 也。故、云「宇賀」。即、北海濱、有磯。名「脳磯」。高1丈許。上、生松 茂。至磯 里人之 朝夕 如往来。又、木枝、人之、如攀引。自磯、西方 有窟戸。高・廣 各6尺許。窟内在穴。人 不得入。不知深浅也。夢 至此磯之邊 者、必 死。故、俗人、自古 至今、號「黄泉之穴」也。

鰐淵寺

根本堂

蔵王堂

[見学にあたっての事前知識]

武蔵坊弁慶が大山寺から鰐淵寺に一晩のうちに「銅鐘」を運び込んだ話をはじめ多くの伝説があり、地元に親しまれている山陰屈指の天台宗の古刹です。そして、今年の３月１日付で「国の指定史跡」になりました。「鰐淵寺」の名前の由来等はパンフレットをご覧いただくとして、このお寺何と「延暦寺」との間に本末寺関係が出来上がりつつあったようです。地名が「別所」となっているのは、延暦寺を本寺とするのに対して、「鰐淵寺」を「別所」としたことによるそうです。

蔵王権現信仰にはじまり、平安時代に広まった「末法思想」が地方に伝播したことによって、鰐淵寺は延暦寺という中央の大きな勢力と結ぶことで大きく発展していたと考えられています。

[見どころ]

・(時間があれば)「浮浪の滝」と「蔵王堂」は見ておきたいところですが―――。

・壬辰年銘　銅造観世音菩薩立像：台座の記載から６９２年の制作か？（白鳳彫刻）

西谷墳墓群　　島根県出雲市

出雲市大津町の西谷丘陵にある西谷墳墓群は、弥生時代後期から古墳時代にかけて造営された一大墳墓群です。墳丘墓は合計２７基が認められており、土壙墓、石棺墓などが確認されていますが、特徴的なのは四隅突出型方墳（よすみとっしゅつがた）です。

これは、古墳時代の初期に山陰地方を中心に北陸地方へ至る日本海沿岸地域に出現した、地域色の強い墳形で約９０基が確認されています。方形の墳丘の四隅が対角線上に大きく張り出しているのが特徴で、上空から眺めるとヒトデや、糸巻きのような形状をしています。

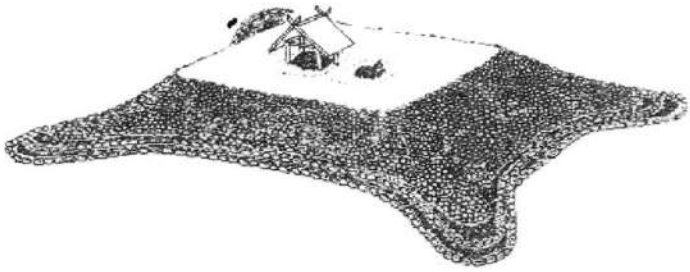
墳丘斜面に貼り石を施し、その裾に列石を巡らしていることもこの古墳の独自性を示しています。

西谷墳墓群の中ではＩ～４、６、９号墓が四隅突出型方墳です。特に３号墓と９号墓は大きく、東西４０ｍ、南北３０ｍ（３号墓）にも及び、古墳を造営させた人物の勢力のほどが窺えます。おそらく当時の出雲地域で最も権力のあった人達の墓群なのでしょう。

西谷 3 号墳丘墓の埋葬施設は岡山の楯築墳丘墓と同じような構造の木槨墓であり、埋葬後の儀礼に用いた土器の中には吉備の特殊器台・特殊壺や山陰東部や北陸南部からの器台・高杯などが大量に混入していました。

島根県では、ほかにも仲仙寺墳墓群、安養寺３号墳などが四隅突出型方墳であることが確認されていますし、広島県の島根県堺近くに位置する矢谷墳丘墓など９基や、岡山県津山市付近でも２基発見されています。

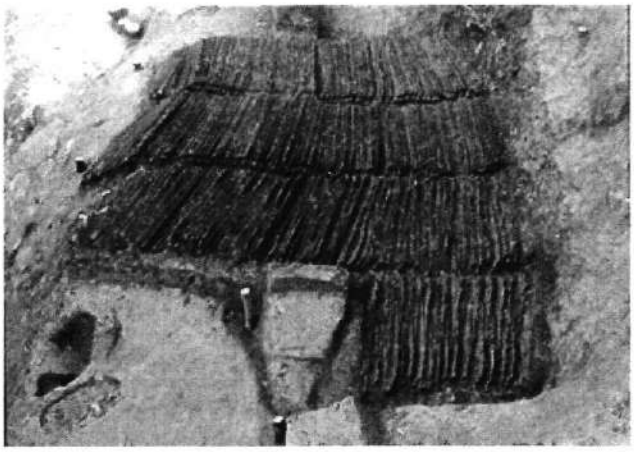
特殊器台・特殊壺など吉備の供献土器

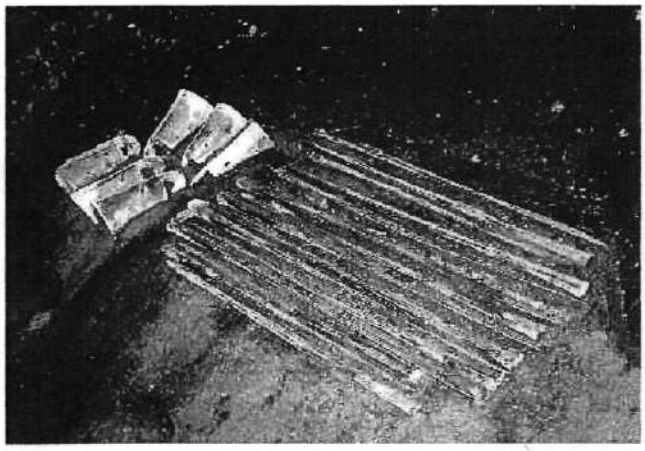


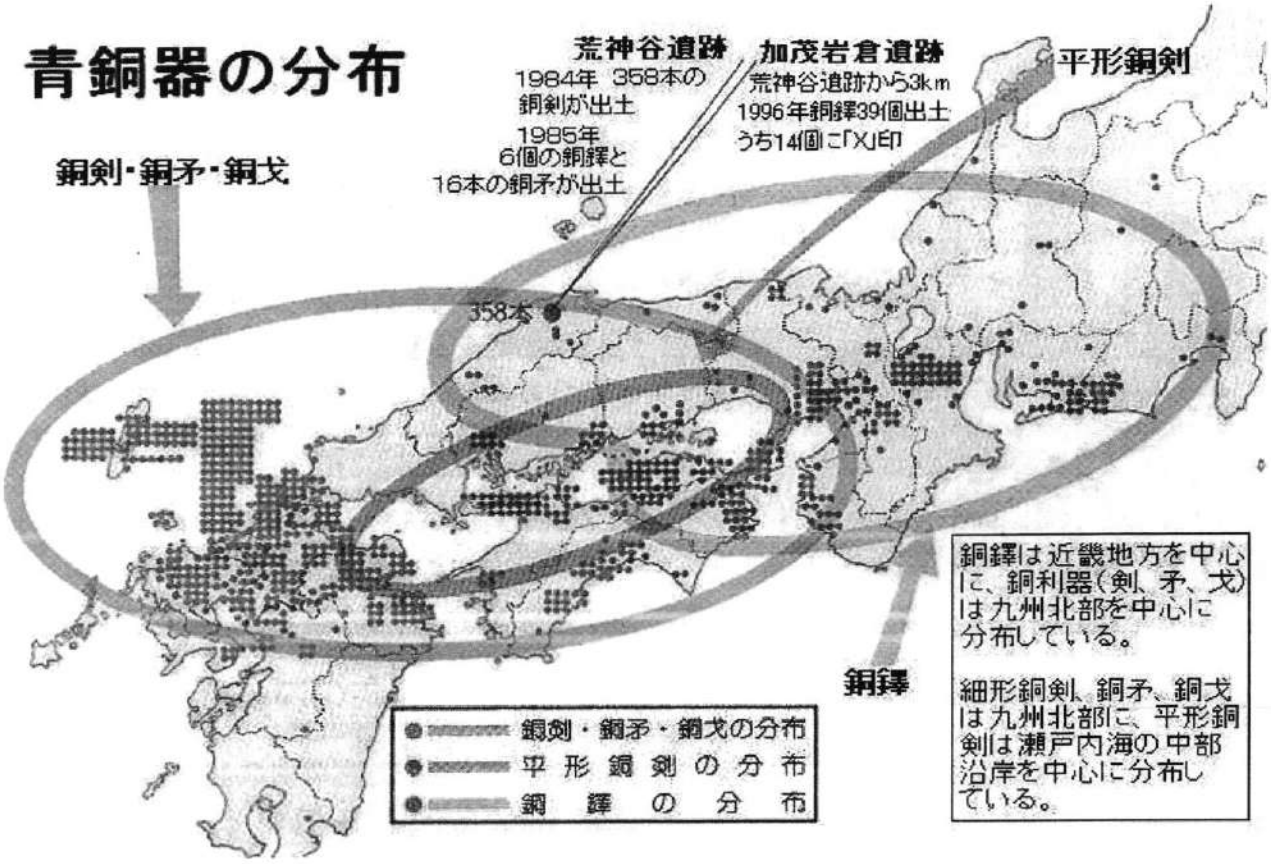
四隅突出墳・完成直後のイメージ図

神庭荒神谷遺跡　島根県簸川郡

島根半島を対岸に見る宍道湖の南側の低丘陵地帯に位置しています。
昭和５９年（１９８４年)、ここから３５８本もの銅剣が出土しました。それまでに銅剣は全国で約３００本発見されていました。北部九州ではまとまって出土することもありました。しかし、九州以外の地で、しかも１か所からこれほど多数出土し、さらにそれが偶然ではなく、発掘調査によって発見されたのは注目すべきことでした。
ほとんどの銅剣の茎（なかご：剣の根元の柄を差し込む部分）には「×」印が刻まれていました。さらに翌年の調査で銅鐸６個と銅矛１６本が出土し、銅矛には九州に類例のある綾杉文を研ぎ出したものがありました。
弥生時代の青銅器の材料は中国からもたらされたという考え方もありますが、この地域でも銅の採掘が行われていた可能性も否定できません。





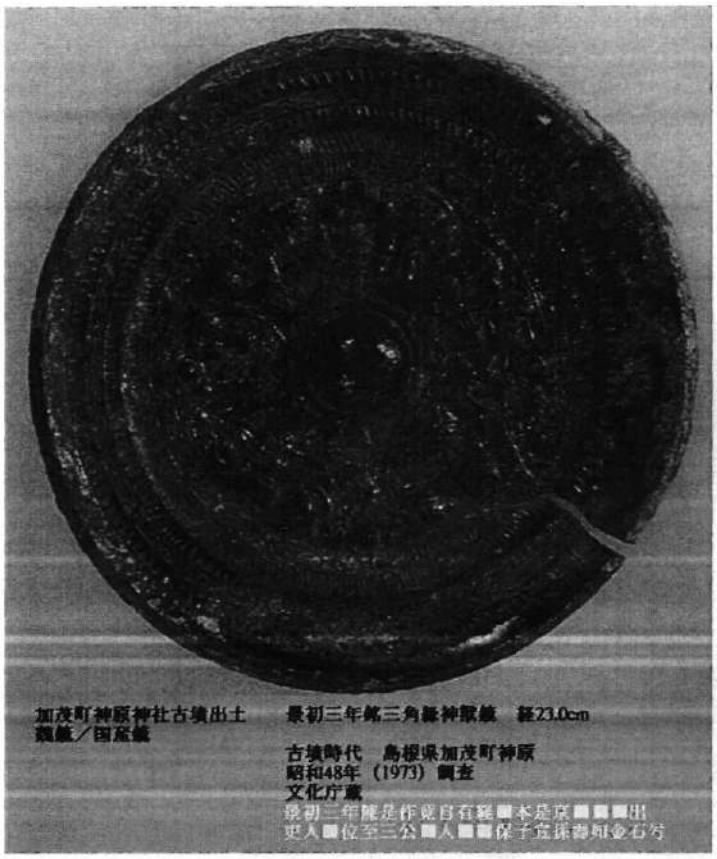


加茂岩倉遺跡　　島根県雲南市

神庭荒神谷遺跡の南東３．５ｋｍ地点に位置します。
平成８年（１９９６年）の農道工事の最中に細長い谷の奥の突き当りにある丘陵斜面から偶然銅鐸が出土したことが遺跡発見のきっかけでした。
この遺跡からは、合計３９個の銅鐸が出土しました。これは１か所の遺跡からの出土数としては滋賀県大岩山遺跡の２４個を上回る全国最多の出土例です。しかもこの銅鐸群の中には、大型銅鐸の中に小銅鐸をおさめた入れ子状態のものが１５組もありました。発掘の時点で入れ子が確認されたという意味で全国的にも貴重な資料と言えます。
また銅鐸の中にはほかに類例のない文様が見られ、この地域でつくられた可能性があります。ただし、出雲地域からは銅鐸の鋳型は発見されていません。

神原神社古墳　　島根県雲南市加茂町

神原神社について「出雲国風土記」には「神原社」と記され、神祇官に所属しているとある。延喜式神名帳に「神原神社」と記されている。主祭神は大国主神。
昭和４７年（１９７２年）の赤川（斐伊川水系）の改修工事で社地が新堤防域に組み込まれるために神社を南西に５０ｍほど遷移することになり、その際に旧社地の下にあった古墳の発掘調査が行われた。
竪穴式石室からの出土品の中に魏の「景初三年」（２３９年）の銘が鋳出された三角縁神獣鏡があった。（魏志倭人伝には卑弥呼が遣使した際に銅鏡百枚を下賜された、との記述があり、その中の一枚ではないか、との説がある。景初三年の銘がある鏡は、大阪の和泉黄金塚古墳から出土した画文帯四神四獣鏡がある）
この銅鏡を含めた出土品（素環頭太刀や鉄鏃など）は、一括して国の重要文化財に指定されて、古代出雲歴史博物館に保管されている。



竪穴式石室 埋葬部

古墳（方墳）全景　（旧社殿上）

出雲國一之宮 熊野大社

熊野大社

島根県松江市八雲町熊野2451　神社の前の流れは意宇川

＜旧　称＞ 熊野坐神社　熊野大神宮　熊野天照太神宮

＜別　称＞ 日本火出初社 出雲國一宮

＜主祭神＞ 加夫呂伎熊野大神櫛御気野命と称える素戔嗚尊（かぶろぎくまのおおかみくしみけぬのみこと　すさのおのみこと）

＜神　紋＞ 一重亀甲に「大」の文字

＜例祭日＞ 10月14日

＜主祭典＞ 節分祭　御櫛祭　鑽火祭　御狩祭

＜文　献＞『日本書紀』(720)に出雲國造をして厳神の宮を作らしむとの記載あり。※当社は平安時代のある時期までは杵築(きづき)大社(現出雲大社)より格上の存在であったことが確実であるが、現在もなお残る祭祀の状況から見ると、出雲国造が出雲へ移る際に同格の存在となったようである。

『出雲國風土記』(733)に熊野大神の記載あり。

『令義解』(834)に熊野大神の記載あり。
『日本三代実録』(901)に熊野大神の記載あり。
『延喜式』(927)に熊野大神・熊野大社の記載あり。

特に出雲大社宮司の襲職は当社から燧臼燧杵の神器を拝戴することによって始まるのが古来からの慣で今も奉仕されている。(平安中期に創建された神魂(かもす)神社において一時期この火継神事を行っていたという記録がある)

・茅葺屋根
・四方の壁は檜皮で被覆され、竹で出来た縁が巡らされる。
・発火の神器である燧臼（ひきりうす）燧杵（ひきりきね）が奉安されている

鑽火殿　出雲大社宮司の火継式の場

須我神社

拝殿

日本で一番古い歌の「石碑」

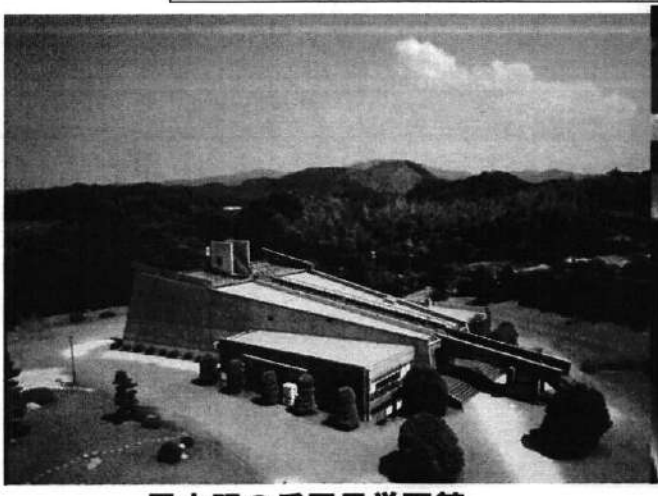
[見学にあたっての事前知識]

「吾（あれ）此地（ここ）に来て、我（あ）が御心須賀須賀斯（すがすがし）」

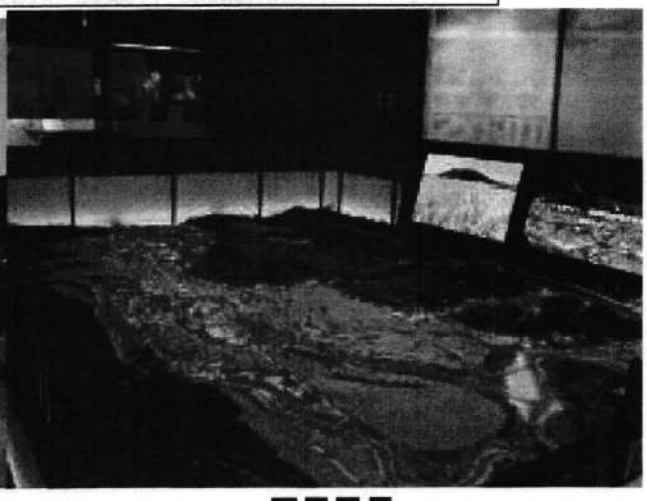
「古事記」によるとヤマタノオロチを退治したスサノオノミコトが、クシナダヒメとともに八雲山の麓に至ったときにこのように言ったというのです。そして、そこに宮を造って「須賀」（＝「須我」）と呼ぶようになったのです。さらにスサノオは、そこから美しい雲が立ち昇るさまを見て「八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣作る　その八重垣を」と歌ったのです。#

石鳥居の近くには「日本初之宮」と記された石碑が立っています。拝殿本殿に至る石段の傍らには「八雲立つ」の歌を刻んだ碑があり、「和歌発祥の地」であることが分かります。「出雲」という国名もこの歌に基づいていることから、出雲の原郷というべき場所なのです。

八雲立つ風土記の丘



風土記の丘展示学習館



展示風景

[見学にあたっての事前知識]

八雲立つ風土記の丘一帯は、奈良時代に編纂された「出雲国風土記」の国びき神話ゆかりの地、意宇（おう）郡の中心にある地域です。周辺には古墳時代の遺跡をはじめ方墳や前方後方墳などの多くの古墳が分布し、奈良時代の政治、経済、文化の中心地として、国庁、国分寺、出雲国造家ゆかりの神社や寺もあり、文化財の一大宝庫です。

八雲立つ風土記の丘は、それらの遺跡を整備し、総合的に保存活用する目的でつくられました。国の指導による風土記の丘構想の一環に基づき、全国で六番目に出来た施設であり、島根県の古代文化紹介と保護を行なっています。

その中心となる「展示学習館」には、風土記の丘地内出土の遺物をはじめ、出雲国風土記の写本や奈良時代の地内の様子を再現した模型など、県内の古代史を語る多くの資料が展示してあり、園内には、「額田部臣」の銘文入り大刀が出土した「岡田山1号墳」や風土記植物園もあります。平成19年7月21日、ユニバーサルデザインに対応し、また展示内容も一新してリニューアルオープンしました。

出雲国府跡（国庁跡）

国府跡

六所神社

[見学にあたっての事前知識]

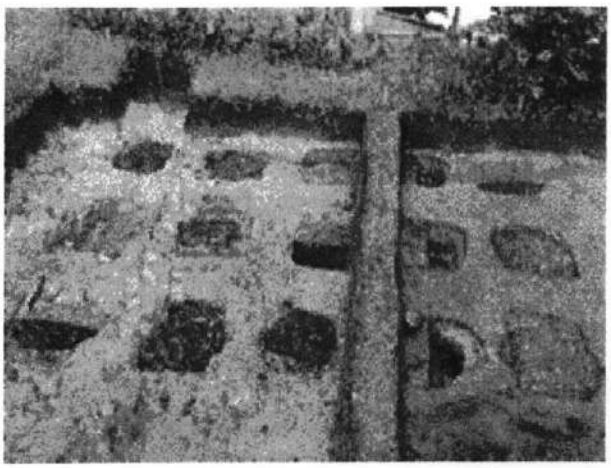
島根県松江市大草町・山代町ほかにある国府跡。出雲国庁が意宇平野に所在したことは奈良時代に編纂された『出雲国風土記』に明らかだったのですが、その所在地については不明でした。1968年（昭和43）から3年にわたって発掘調査が行われ、「六所神社」境内東側に国庁とみられる掘立柱建物の遺構が確認されました。

建物は7世紀後半から9世紀にかけて前後6期に分けて建てられたことが判明し、「大原評□部□□」「進上兵士財□□」と記された木簡のほか、「厨」「国」などの文字が墨書された土器、和同開珎(わどうかいちん)などが出土しました。また、発見された溝地割りと六所神社脇の遺構を検討すると、近江国衙(こくが)の地割りとも一致し、出雲国庁の正庁後殿の位置の推定が可能となりました。1971年（昭和46)、2町（約218m）四方の国府跡とこれを囲む当時の条里制の水田地帯を含めた地域が国の史跡に指定されました。

現在は復元・整理して公開されていますが、出土品のおもなものは「八雲立つ風土記の丘展示学習館」に保存・展示されています。

山城郷正倉跡

山代郷正倉跡（左後ろは茶臼山）



発掘当時の山代郷正倉跡

[見学にあたっての事前知識]

松江市山代町の、いわゆる大庭十字路の一角には「山代郷正倉跡」があります。以前から炭化した米が発見されていたことから、山代郷の正倉（税として納められた米を置いた倉庫で、各郡ごとにありました。）と推定されていました。「出雲国風土記」には、「山城郷は群家の西北三里二十歩（約１．８キロメートル）のところにあり――正倉あり」と書かれています。

発掘調査では４棟の正倉の跡と、数棟の管理用と考えられる建物跡が発見されました。正倉は小さいものでも東西 5.6m、南北 7.5m、柱の大きさが直径 50cm と、非常に多きな建物でした。発掘では４棟の正倉跡が確認されただけですが、配列から３棟が２列に整然と並んでおり、各列の中央にはそれを管理するための建物群があったと推定されます。

神魂（かもす）神社

日本一古い大社造りの社殿

第二の鳥居

[見学にあたっての事前知識]

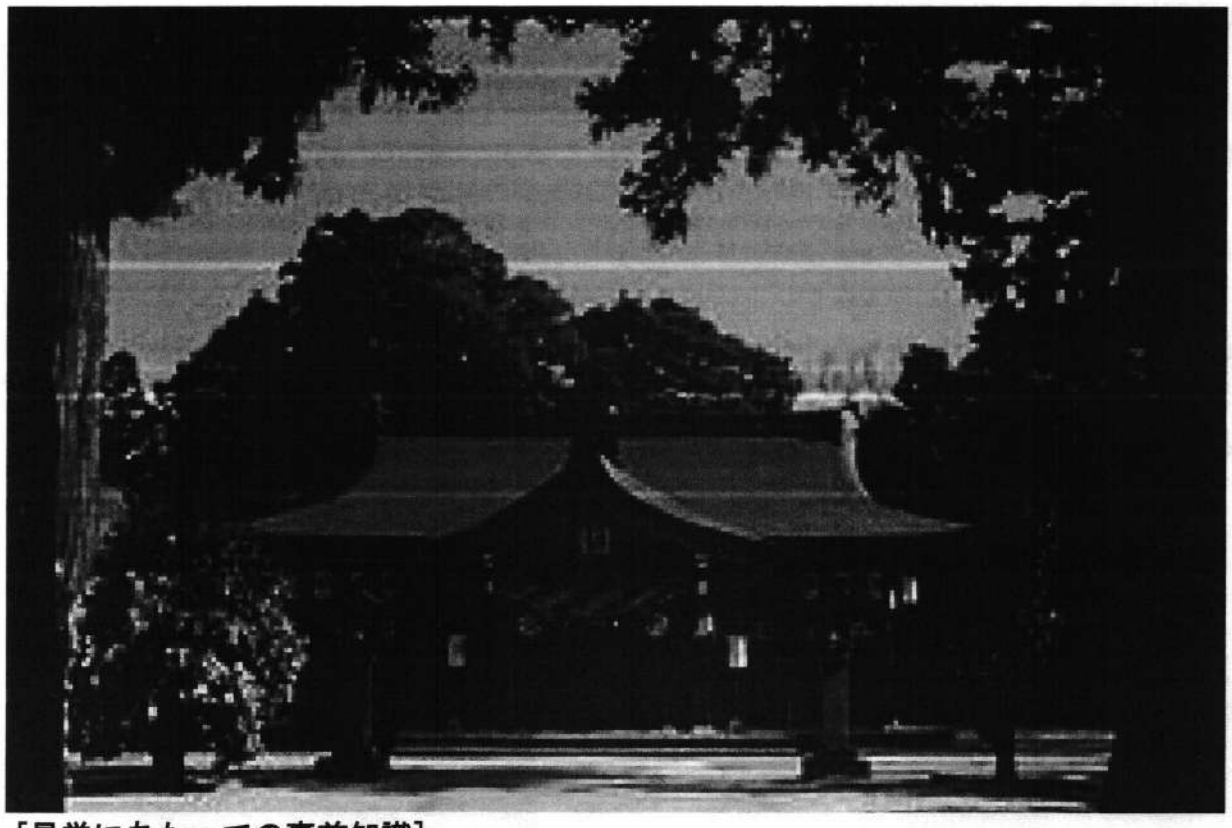
本殿は、現存最古の「大社造」で国宝に指定されています。熊野大社・八重垣神社などと並び「意宇六社」の一つに数えられる神社でありながら「出雲国風土記」や「延喜式」に記載がないのは、「出雲国造家の私斎場的な社」だったからのようです。

[見どころ]

・本殿：現存最古の「大社造建物」で国宝に指定。１５８３年の再建と推定される。

・貴布祢（きふね）・稲荷両神社：流造（ながれづくり）で、桃山時代の建築様式をよく伝え、国の重要文化時に指定されている。

八重垣神社



[見学にあたっての事前知識]

「八雲立つ　出雲八重垣　妻込みに　八重垣つくる　その八重垣を」の古歌で名高い神社で、出雲の縁結びの元祖素盞嗚尊（すさのおのみこと）と稲田姫（いなたひめ）を祀っています。素盞嗚尊（すさのおのみこと）は八岐大蛇（やまたのおろち）退治のあと稲田姫とともにここに新居を営んだといいいます。

八重垣神社で見落せないのは収蔵庫に納められている壁画（重要文化財）。神社の障壁画としては日本最古のものといわれ、落箔が甚だしいが、戦後造営の際本殿から取り外して樹脂注入など保存措置を講じました。

全部で 3 面ありますが、稲田姫を描いたとされる、もと正面にあった壁画が最も保存がよく、匂うような肌と髪、鮮やかな紅の唇などとても数百年を経たとは思えないほど。ヤリガンナで仕上げたスギ板の上に直接描かれていますが、絵具などは現代すでに求め難い優秀なものが使われているといいます。かつてこの壁画の裏側は、本殿の外面でもあったので、むかしの参拝者の落書きがあるのも一興。

境内に一対ある狛犬（こまいぬ）はたてがみに特徴があり、日本の神社に狛犬が登場した初期ごろのものではないかといいます。

佐太神社

質問

①主祭神である、佐太大神（猿田彦大神）の外貌は日本書紀において「その鼻の長さ七あた（尺に只）、背の長さ七尺余り。七尋と言ふべし。且、口・尻、明耀れり。目は八あた鏡の如くにして、かがやける（赤に色）然赤酸醤に似れり」とあるが、これは所謂誰のことか？ついでに、奥さんの天宇受売神は一般的に何と言われているでしょうか？
②猿田彦は「導きの神」と言われているが、誰を何処に導いたのでしょうか？
③ユネスコ無形文化遺産に登録されている「佐陀神能」とは何をする祭事でしょうか？

豆知識

ー田中神社祭神についてー
猿田彦の先導により降臨した、ニニギ命が姉妹である姉の磐長姫命（永遠性を司る）と妹の木花開耶姫命（繁栄を司る）を娶るも、磐長姫命の余りの醜さに、美しい木花開耶姫命を寵愛したため、磐長姫命の呪詛により、折角「永遠の繁栄」を手に入れたにも関わらず、人間全般また天皇の寿命が短いことの起源となってしまいました。
それ故、両姫を祀った田中神社の東社と西社はお互い背を向けて立っているとのことです。

田中神社

見どころ

①「本殿の三殿並立の社殿」神社建築史上特筆すべきもので、国の重要文化財に指定されています。
②色々威胴丸（鎧）　室町時代
③色々威腹巻（鎧）　室町時代
④鏡2面　南北朝時代
⑤舞楽面　陵王　鎌倉時代
他県指定有形文化財多数

佐太神社社殿

松江城

質問

①堀尾家を継いで城主となった京極忠高の母親は浅井長政の娘3姉妹の一人だが、何番目の娘ですか？
②松江城築城には5年かかっていますが、その内石垣工事に費やしたのは何年でしたか？
③松江城の石垣は野面積みと打ち込み接の手法を用いていますが、野面積みとはどのような手法でしょうか？

豆知識

①京極忠高の父親の高次の妹は秀吉の側室であり、妻も有名人であることから、その七光りで出世したとされ、「蛍大名」と揶揄されたらしい
②人柱伝説
石垣工事で何回も石垣が崩れ落ちるため人柱をたてることになった。盆踊りを催し最も美しく踊りが上手な少女が選ばれ生贄にされた。ただ、城落成後、堀尾家は城主の父子が急死してお家断絶となった。その後松平氏の入城まで天守からはすすり泣きが聞こえたと言います。そう言えば。堀尾家の後の京極家も忠高死後京極家は一旦廃絶となってますね～また、城が揺れるとの言い伝えで城下では盆踊りをしなかったとのことですが、これは単に地盤が緩いためだと思いますが・・・

見どころ

①地階（穴倉の間＝貯蔵倉庫）にある井戸
②2階の四隅等にある「石落とし」穴
③桐の階段　引き戸により開口部を塞ぐ仕掛け有り
④包板　天守を支える柱が鎹や鉄輪で留められている→割れ隠しなど不良材の体裁を整えるため
⑤天守の入母屋破風　　千鳥が羽を広げたような様が美しいため、松江城を別名「千鳥城」とも呼ぶ

松江城天守の特徴

鯱鉾（しゃちほこ）

木彫銅張り、向かって左が雄で鱗があらく右が雌。高さは2.08メートルあり、日本現存の木造ものでは最大である。

望楼式（ぼうろうしき）

天守閣の起源の一つは四方を展望できる望楼である。五層の最上階は手すり（高欄）を巡らし、壁のない360度展望のきく望楼で、展望台・司令塔の役割をもっている。

入母屋破風（いりもやはふ）

千鳥が羽をひろげたような三角形の部分をいい、天守閣の美観を構成する重要な部分である。望楼とともに桃山時代の様式を継承している。

下見板張り（したみいたば）

姫路城や彦根城のような塗籠造り（白壁）は少なく、その大部分が、黒く厚い雨覆板でおおわれ、古い様式を保っている。

鬼瓦（おにかわら）

各層の屋根の隅々にある鬼瓦は、後世のものとは違って角がほとんどなく、各一枚ごとに異なった珍奇な表情をもっている。

華頭窓（かとうまど）

三層の中央にある寺院様式の窓で、一種のかざりである。

附櫓（つけやぐら）

天守閣入口の防備をかたくするためにとり付けた櫓で、入口鉄延板張りの大戸があり、入ると枡形の小広場が二段あって、侵入しにくいようになっている。